



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問で
もいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼読解マラソンのページから^{どっかい}答えを^{こた}送信する^{そうしん}場合^{ばあい}（この場合^{ばあい}作文^{ぶん}用紙^{ようし}に^{こた}答え^{こた}を^{ひつよう}書く^{ひつよう}必要^{ひつよう}はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

名前 / ページ番号 1 月 4 日 曜日 先生 名前 名前 名前
 問 問 問 問 問 問 問 問
 8 7 6 5 4 3 2 1
 答え
 3 1 1 2 1 3 1 2
 もんた い

作文教室 生徒のページ			
欠席連絡	自宅メール	読書の坂	読書の壁
読書の道	作文の丘	読解マラソン	山のたよ
啼鳴の自習の仕方	啼鳴用紙	音声の方法	付箋読書
イメージ記憶	読学生制度	問題集読書申込	喜んだ大
作文の日コンクール	問題集読書と四訂詩の手引	タイマー	

読解マラソンのページに行きます。

Online 作文・読文教室 言葉の森 案内 作文 読解 国語 質問 生徒

読解記事 読解教材 読解ソフト

読解マラソン

読書好きにするには 語彙力の土台は読

問題のページに行きます。

●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン会場(掲示
●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答チェック(管理用) ●アイテムチェック

国語力をつける 読解マラソン

0. 読解マラソンの仕方

マラソンの木(問題のページ) ●自宅メール
●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン応場(場)
●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答チェック(管理用) ●アイテムチェック

コードとパスワードを入れてください。

コード: パスワード: (先生用: 先生コード:)

コードとパスワードを入れて
送信します。

マラソンの木(問題のページ) ●自宅メール

●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン広場(掲示場)
●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答チェック(管理用) ●アイテムチェック

あなたは、 さんです。そうでない場合は、ログアウトしてください。

ログアウト

nnza→ 5.4

月と週の数字をクリックします。

マラソンの木(問題のページ) ●自宅メール
●読解マラソン ●長文サンプル ●自分のページ ●問題のページ ●マラソン広場(場)
●問題作成(管理用) ●問題印刷(管理用) ●解答者チェック(管理用) ●アイテムチェック

コード: パスワード: (先生コード: 先生パスワード:)

nnza-05-4 問題1:

問1 読解マラソン集5番「子どもというものは」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 大人になっても、解釈され理解される姿にならない子供がいる。
B 学校で、暗記や訓練が強制されると、かえってその結果のほとんどは忘れられる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 1A× B○ 4 A× B○

解答1:  

答えの数字を入れたあと
確認ボタン、
決定ボタンを押します。

日本人の生活で顕著なひとつの特色として言われているのが、日本人の勤労精神である。芳賀矢一が明治四〇年に書いた『国民性十論』は名著の聞こえ高い本で、「忠君愛国」とか「清浄潔白」とか、十か条のものを教えていた。ところが、「働き者だ」ということは書いていないのである。当時の日本人も今と同様勤勉だったろうが、芳賀は、日本人が働くことは当然だと思っていられない。いかにも日本人の勤労を愛する精神が表れているのではないか。

アメリカあたりの町では、すべての商店は日曜日はやすみで、たまに、神が日曜日を休息の日と定めたのであるから、この点は日本人は罪深きものとして非難されている。それはともかく、独立そのものが危ぶまれた第二次世界大戦終了時の状態以後の経済成長ぶりは、日本人の勤勉さのたまものにはない。筆者はインドネシアに行った時に、バスに乗るために道を走って笑われた。現地ではおとなは走るものではないのだそう。そう言われてみると、アメリカでは日本人と同じようにおとなが走る姿をまれに見かけることがあるが、中国やタイではそのような情景は見えない。

一体に日本人は、海外に行ってもせかせかしている。空港の待合室で、飛行機の出発が一時間おくれるというニュースが入っても、外国人は大体平然としている。日本人に限って急にそわそわして立ち上がった、もう一度みやげ物店へ行ったりして、時間をつぶそうとする。日本人は始終なにかしていないでいられない民族らしい。

日本人のこの性格をよく表しているのが、「働く」という単語である。第一にこの「働」という字は中国の文字ではなく、日本製の文字、国字である。おそらく国字の中で、最も使用頻度の高いのはこの「働」という字ではないか。一般に国字には、訓読みはあっても音読みはないものであるが、この字に限ってドウという音読みをもっている。最も重要な国字がハタラクという字だということは、日本人の勤勉性を象徴していると思う。

そうして、このハタラクは英語にすれば work になるが、その語義を比べると、ハタラクの方が語義が狭く、使い方がやかまし

い。たとえば机に向かつて勉強しても、英語では work であるが、日本人はそういうのを「ハタラク」とは言わない。ハタラクは自分のために事をするのではないので、何か他の人の利益になると——金をとつてくるとか、掃除・洗濯をしてくるかがハタラクである。日本人は「うちの娘は勉強ばかりして、ちつとも働かない」などと言うが、これを英語に訳することは難しかろう。ハタラクの反対語はアソブというが、これも英語の play (プレイ)とは違う。play は「何かすること、よいことであるが、日本の「アソブ」という方は、むしろ「何も役に立つことをしない」ことで、悪いことである。

じれつたく師走を遊ぶ指咄めという川柳があるが、相撲の中継放送などで「朝潮の右手が遊んでいる」というように、よくない例に引かれ、日本的である。このごろは、日本人はレジャーの楽しみ方を知らないなどという評論がよく聞かれるが、日本人は遊んでばかりいては不安になる民族である。ついでに筆者は、いかにも働くことの好きな日本人の好む言葉として「いそしむ」という単語をあげたい。和英辞典を引くと、「いそしむ」はイコール「励む」で endeavor と書いてあるが、筆者に言わせると「励む」と「いそしむ」は違う。「励む」はガムシヤラに働くことであるが、「いそしむ」は、働きながら、働くことに喜びを見出しているニュアンスがある。日本人は働くことを愛する。だからこそ「いそしむ」というような言葉ができるわけで、いかにも日本語らしい単語だと思う。

(金田一春彦「日本語」)



若い人達の敬語が乱れている、という。しかし、おとなもずいぶん、いいかげんである。

——総理の申されますには……などということばは、議会の中継などを聞いていると、しきりにでてくる。これは、間違いである。

申される「れ」は、この文句をしやべっている人の、総理に対する敬語である。ところが、「申す」というのは「言う」ということばの、へりくだった言い方であって、それでは、「申す」と「れ」とが折り合わない。「総理の言われますには」とでも言えばよいのだが、あきらかに、謙譲語と尊敬語の混乱使用である。

もつとも、「総理がもうしますには」という場合もありうる。

しやべっている人の、総理に対する敬意は別として、総理の下にいる者が、他の人に対してへりくだった言い方をする場合だ。会社の電話の交換手なら、他からかかった電話口で「ただ今、社長がいらつしやいません」といつては、他に対して失礼だろう。かといって「ただ今、社長はいません」も乱暴だ。適切には「ただ今、社長はおりません」といべきだ。

つまり「おつしやる、いう、もうす」の三通りの言い方に対して、「いらつしやる、いる、おる」が、対応しているわけだ。そして、この対応の、敬語、謙譲語を、さまざまの人間関係で使い分けることは、なかなかむずかしくて、決して、「若い人」だけの乱れではないのである。

ことに、茶の間のことば、家庭内のことばを、そこにそのまま持ち出すことは、全くおかしい。そして、これも決して若い人だけの錯乱混用ではなく、相当の年輩の人でもよくやりそこなっている。

今はもう、六、七十歳に達しているはずの老婦人たちが、今から三十年ほど前そういう錯乱混用をわたしの前で実演したのには、驚いた。わたしがまだ二十二、三歳、大学でたての教員で、中学校の教師となつた折のことである。父兄会で面接すると、母親たちが、実にめちゃめちゃなのである。

——おにいちゃんの方は、ほうつておいても、一人でどんどん勉強するのですが、ぼくちゃんの方は、少しも勉強しません。

わたしは、その「ぼくちゃん」の担任として、その、おにいちゃん、ぼくちゃんの兄弟の母親と、話しているのである。

——あの子もかわいそうで。何しろおとうちやまが、喧ましゅうございまして。

わたしの面接している女性の亭主が「おとうちやま」なのである。

そしてこれらの例は、戦前、昭和十年代に、わたしを驚かせたことばづかいである。今の若い人達だけを、とやかくいうことはできない。

問題の一つは、社会における人間関係の変わり方の激しさである。

敬語ということばづかいの体系を支えて来ていた、旧社会の、目上、目下、長幼序ありの根本的な感覚が、変わってしまったえば、そうした感情なしに使えば、形式のまねぞこない、ということも起るだろう。

し、第一に、初めから、使おうともしなくなってしまうであろう。それは、敬語のことばづかいが乱れたのではなく、その背後の社会的人間関係が変わり、特に、目上だから、先生だから、親だから、という

だけで、まず尊敬する、という感情が失せたのである。だとすれば、敬語の乱れを叱る前に、そういう変化をどう認識するかが、大事である。

ふだんのことばづかいと、よそゆきのことばと、使い分けることは、必ずしも賛成しないけれども、茶の間と会社とは、自然とそこに相違がある。それならば、少なくとも、その人間関係においては、ていねいなことばを使うことは、必要であろう。そのことぐらひは教えなくてはなるまい。若い人が流行語を盛んに使うことなどは、さして心配することはない。自分で自分を規制しうる者なら、そう不快なことばなどは使わないからだ。

(池田弥三郎「暮らしの中の日本語」)



春太は、さつきから何度も、鞠投げの仲間に入れてくれよと頼んだが、彼は受け入れてもらえなかった。「くやしかったら、ひとりでおやり。」「ハッチャンとやればいいものを。」ハッチャン……。

春太はこのようなしんらつなものを、期待していなかった。彼の顔は、まっかになってしまった。すると、それをあおるように、最後にアサコが、「ハッチャンと、仲よしだもんね。」といった。

しかし、アサコはさすがに、日ごろから春太と二人きりで遊ぶ手前があるので、面と向かつてはいえなかった。それで、鞠をほうりながら、それを受け止める相手に向かつて、同意を求めるようにいった。アサコまでが、それを信じているとは。——春太はもうがまんできなくなった。春太はハツなんかと、何でもありやしない。鉛筆を貸してやったのは、好きだからではないのだ。級長であることの責任感から貸してやったにすぎないのだ。

春太は一人一人捕まえて、彼女らが信じていることは、根も葉もないうそであると納得させてやりたい衝動を覚えた。それは無駄な努力にすぎない。なぜなら、一人一人を捕まえてみれば、春太に征服されてしまうのであるが、集団に返れば、再び手に負えないものに逆もどりするのであるから。

春太はハツと仲よしなどといわれるのが恥ずかしくもあり、くやしきもある。そのとき、持っていき場のないふんまんは、何というよいはけ口を与えられたことであろう。アサコの手をそれたボールが、春太の足もとに転々と近づいてきた。

しめた。——アサコが追っかけてきて、手を伸ばしかけたところを、横からやにわにボールを奪い取ると、春太は桶を回つて、宝蔵倉の方へ逃げ出した。返してよ、返してよ。ざまあ見ろ、思い知ったか。

ところで、春太がアサコに追われて、宝蔵倉の前の、だれもいないところまで来たとき、事態はへんてこになってしまった。アサコ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

は真剣になって、ボールを追ってくるのだ。彼女はボールのみを念頭において、そのボールを奪った春太を追っかけてくるのだ。春太の気持ち——仲間に入れてくれないばかりか、ハツの名まで持ち出して、いやがらせをいった腹いせなど、彼女は忖度する余裕をまるでもっていないのだ。もし、鞠を失うようなことになったら、アサコはその場で泣きだすかもしれない。しかし、春太はこのままおとなしく返してやる気には、どうしてもなれない。そのようにばつの悪いことが、できるものではない。

もう、どうにでもなれという気持ちわいた。春太はボールを宝蔵倉の横から、坂の下の方へ力いっぱい投げた。二人は坂を一気にかけ下りて、ほとんど同時に、ボールの場所に到着した。そして、二人はそこで、はからずも鉢合わせをしなければならなかった。それははげしい衝突だった。

アサコの額は、こんなにも固かったのか。——春太はめまいを感じて、そこに膝をついてしまっていた。二人は二人の間のボールを取ろうとしなかった。そして、痛みの方を待っている間、相手も互いに眺め合っていた。何というこっけいな場面だろう。春太はおかしくなつて、ちよつと笑つてみた。するとアサコも、それに応じた。二人は同時に笑い出した。

春太は、そのような変な巡り合わせの場所で、今までアサコとの間には、一度も存在したことのなかった、ある平和な気持ちが生じていることを感じた。それはまさしく、アサコも感じているものに違いなかった。二人のもっている真実の面が、ぴったりと重なり合つて、そこに生じる和やかな美しいリズムであった。

春太は、ついさつきまで抱いていたふんまんや腹いせや、それに伴う快感など、そうしたものの一切が、春光につつまれた雪塊のように、跡かたもなく溶け去っていくのを感じた。

「ごめんね。」と、アサコが立ち上がるときいった。春太も、何かわびたいような気持ちがあった。しかし、春太は微笑して、首を左右に振った。

(新美南吉「鞠」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

美術担当の先生洋は、学校の近くで開かれている写生大会を見まわしながら指導していたが、その途中で、描くのに苦労している女の子の下絵をよかれと思って手伝った。一方、学校で何かと話題の中心になる根元少年の姿が見えず、気になっていたが……。

ふりむくと――根元少年が立っていた。

―先生は描かんのきやあ？と、きいた。

―ん？ 今日は見まわるだけで手一杯やからな。正直に答えてから、ふと気になってきき返した。

―根元はもう描いたんか。

根元少年は黙って画板をさしだした。白紙だった。ピンを外して裏返して見ても何も描いてなかった。

―今までなにしていたんや。

ちよつときつい声になってとがめるように言ってしまった。根元少年は平気で、チヨウチヨを追いかけてとた――と答えた。

―白紙なんか受けとらへんよ。と言ってやつても、やっぱり平然としている。そしてさつきとおなじ質問をした。

―先生は描かんの？

―描く用意してへんさかいなあ。

根元少年は黙って自分の画板と絵具箱と、カンヅメを利用した水入れをさしだした。

―根元のを描いてやるわけにはいかんがな。

やんわり断ると、根元少年はついと横をむいて鼻を鳴らした。

―女の子のは手伝ってやったのによ……。

どこからか見ていたらしい。

―あんまりおそいから、ほんのちよと手伝うたんや。

弁解がましくなると知りながらも正直に説明した。すると根元少年は自分の画用紙を指して、おれの方がもつとおそい……と、つぶやいた。

―それはちがうで。あの子は一生懸命やつてもおくれたんや。根元はチヨウチヨを追うとつておくれただけやろ。

さすがに洋もちよつととんがった声で言つてやると、根元少年は首をすくめ、

―言えてる。

さすがに自分のさぼったことをみとめた。

―今からでも描くか。手伝わんけど、見てたるさかい……。

洋が誘うと、根元少年は素直にうなずいた。

―どこで描くんや？

―さっきの女の子のそこ。

根元少年はただちに答えた。

―あそこ、先生の氣にいったところだろ。

―なんでわかるんや？

―チヨウチヨ追いかけながらでも氣がついとつたけど、先生、あそこに五へんも立ってたもんだでよ。

（ちゃんと見ておったんやな。いや、おれをつけたな。そやさかい、こつちが探しても見つからんわけや……。）

洋は苦笑して、さっきの場所へいそいだ。ところがそこで思いもかけない光景を見てしまったのだ。

（今江祥智 「牧歌」）



さつきの女の子はまだ描^えいていた。それも、もうそろそろ彩色^{さいしよく}が
終わ^{うら}つてもいいところなのに、画用紙を裏返^{うらがえ}して、また初めから描^えい
ているのだ。あいかわらずたどたどしい線^{せん}でまだ建物の輪郭^{りんかく}もとれて
いなかった。あと半時間たらずで仕上げなければならぬというの
に、そのようすでは夜になっても出来上がりそうになかった。
洋が近づくと、女の子はおびえた目つきになった。洋はできるだけ
優^{やさ}しい声でたずねてやった。

—どうしてさつきのに塗^ぬつていかへんかったんや。

女の子はふりむいて唇^{くちびる}をかんだ。なにかを懸命^{けんめい}にこらえている顔
だった。
—きみの好きないろで自由にぬっていつてたら、もう仕上げられたの
に……。

洋が言っても女の子は口をきかなかった。さつきよりもつと強く唇^{くちびる}
をかんだ。両目^{なみだ}に涙があふれたま^{なみだ}った。こぼれ落ちるのをなんとか

こらえていたが、一粒^{つぶ}ぼろんと落ちたのをきっかけに、画用紙の上に
涙の小雨がふ^{なみだ}った。洋はあわてた。そのときになつて、自分がで
しゃばりすぎたことをしたのによく気がついたのだ。この子はこ

の子のテンポとやりかたで描^えいていた。それを洋はぶちこわしてし
ま^{なみだ}ったのだ。女の子は、小さな、けれどきつい声で、さつきの絵は先

生の絵だ——わたしやっぱり自分の絵を描^かきたかつたで……と、
言^かったのだ。洋は胸^{むね}をつかれ、困惑^{こんわく}した。いったいどうすればよいの
か。もうしばらくすると、自分は学校へもどり、全校生徒集合のあ

と、本日の写生大会の終了^{しゅうりよう}を宣言^{せんげん}しなければならなかつた。しか
し、この子の絵はそのときまでにとても仕上がるはずがなかつ

た。女の子はそんな洋を無視^{むし}して、また線^{せん}を引いては消しゴムを使う
——作業をくり返^{かえ}していた。洋は男の子になつて立ちすくんでいた。

すると、さつきみたいに、また背^せ中^{なか}をちゃんとつく者がいた。ふ
りむくと、根元少年がすぐ後ろにきていた。

—まだ仕上がりません生徒がふたりおるで、先生がおしまいまで見とる
——と、学校まで言いにつ^つたるでよ。

（そうや、終了^{しゅうりよう}宣言^{せんげん}なんか誰^{だれ}にかわつてもらえええわ。それよ
りこの子や。この子とおしまいまでつきあうことの方がだいじや）
——たのむわ。

と、言^かつてから、ふたり——いうたら誰^{だれ}のことや、もうひとりとは？と
きいた。根元少年はにっこり笑^{わら}つて自分の顔を指さし、すぐもどる
で……。言い残^{のこ}してもうかけだしていた。

（負^おうた子に教えられ——か）

心の中ではぼやきながら、洋は女の子にいていいなあやまつた。仕上
がるまでここにおるさかい、ゆっくり描^かき。さつきの子もまだやか
ら、ふたりでゆっくり描^かいたらええ……。

女の子は頬^ほからかたい線^{せん}がすつと消え、安心したのか、手の動きが
少し早^{はや}くなつた。

（いまえよしども
今江祥智 「牧歌」）



「お母さん、ごめんね。僕丈夫になるよ。そして大きくなったら、きつと幸せにしてあげるからね」といって、ちよつと泣かせるような言葉で結んだ。題名は『母との約束』とした。

一ヶ月ぐらいたった後、私は職員室に呼ばれた。当時の学校の先生というのは、謹厳実直、聖人君子であり、先生の言うことは、絶対に間違いなかった。私の担任は、若い男の先生だったが、ニコニコしながら、

「関口君、君が書いた『母との約束』という作文ね……、あれ、横浜市作文コンクールで入賞したよ。君、うまいんだね、作文が。これから頑張る……それから、これ賞品」

と言つて、先生がちよつと変わった事をする時の癖である、メガネをひよいと持ちあげて、「賞」と入った大学ノートを渡してくれた。

「ただね、この作文はこれから県の大会とか、いろんな所に回すんだ。だから、この事はご両親にも、誰にもいっちゃいけないよ。先生と君だけの秘密だ」

と言われた。私はちよつとおかしいなと思つたが、「賞」と入ったノートがうれしくて、

「はい」

と答え、自分の席に戻った。

私はそのノートの隠し場所に苦労した。両親にも言つてはいけないという。そのためあれこれ考えたすえ、結局、自宅の自分の机のいちばん奥にしまつておく事にした。余程、母だけには言おうと思つたが、先生の言うことは絶対だと思ひ黙つていた。

ただ、毎日のように、私はそのノートに触り、感觸を楽しんだ。不思議なことに、そのノートにふれると文章がうまく書けるようなきがした。そのため誰もいない時だしてみると、しよつちゆう触るため、一行も書かれていないノートではあるが、表紙だけは真つ黒になつていた。

そのノートは少なくとも小学校を卒業するまではあつた。が、家の引越しのドサクサかなにかに紛れたのか、いつのまにかなく

なつてしまった。

しかし、この作文の「入賞」は、何も取り柄がなかった私にとつて大きな自信になつたし、また先生との秘密を守れたということが、いつも私の心の支えとなつていた。

中学に入る頃から、私は丈夫になり、体も大きくなつて運動も人並みに出来るようになった。また、すべてに積極的になり、受験勉強などしているうちに、書く時間もなくなり、いつの間にか書くという特技はなくなつてしまった。

しかし、この頃になると、例の作文の「入賞」はおかしいなと思うようになった。表彰状もないし、第一あのノートも、「賞」とは記してあるものの、運動会か何かの賞品の残り物のように思えてならなかつた。しかし、それはそれでよいと割り切つていた。

先生との秘密の約束はいつになつても私の心の支えであり、今の自分があるのは先生のお陰だと感謝していた。そして、先生とお会い出来る機会でもあつたら、その時にでも事実をお聞きしようと軽く考えていた。

あるパーティの席で、私は例の先生にお会いするチャンスに恵まれた。

先生は六十をとうに超えられていたが、私のことは覚えておられた。私は今日こそ、例の件を確かめる絶好の機会だと思つたが、先生の方から声をかけられた。

「噂で聞いたよ、銀行の支店長になつたんだつてね。……いや

立派、立派。そういえば、君は子供の頃から、人の言うことを信じて疑わない素直なところがあつたな……。良かった、良かった。まあ一杯どうだ」

私は、

「有り難うございます」

と、深々と頭を下げ、それから一気に飲み干した。目頭が熱くなるような、ツーンとするビールだった。

（関口清「先生」）



バスにのつても、ぼくはずっとバス代のことを考えていた。おかげで吐き気を感じる暇がなかったけど、気分は吐き気をもよおすのとおなじくらいすっきりしなかった。病院のバス停に到着するまでに、なんとかもつともらしい嘘をでっちあげた。

病院のあるバス停についたのは、夕焼けも色あせた、夜も間近の遅い時間になってからだった。ぼくと弟がバスをおりると、びつくりしたことに、母がバス停にいて出迎えてくれた。母は寝間着の上に綿入りの羽織を着て、いつものやさしい笑顔でぼくたちに笑いかけた。弟が母に飛びついていった。どうして母がバス停にいるのだろう？不思議に思いながらも、それでも母がバス停でまっついていてくれたのはうれしかった。

「まあまあ、二人ともよくきたわねえ」

「うん。伸二のやつが、どうしても母ちゃんにあいたいつてきかなくて。そしたら、ぼくも母ちゃんにあいたくなつて」

「そう、よくきたわねえ、二人だけで。さあ、病院にいきましよう。」

家に電話して二人が到着したことを報せなくちゃ。心配しているよ、爺ちゃんと婆ちゃん。母ちゃん、二人があいにきてくれてとつてもうれしいけど、爺ちゃんと婆ちゃんにだまつてくるのはもうだめだよ」

「うん。爺ちゃんと婆ちゃん、いくつていえば、だめだつていうから……。どうしてぼくと伸二がくるつて知つていたの？」

母は笑つて答えなかった。ぼくの肩を抱いて病院に向かって歩き出した。弟のやつは母の手をしっかりと握っている。

「二人がどこにもいないので、きつと母ちゃんのところに行ったと思つて、それで父ちゃんが中央停留所にいつてきいたら、キップ売場の人が二人のことをおぼえていたの。父ちゃんね、いまごろバスにのつてこっちに向かつてるよ。お腹すいたでしょう？ ラーメン出前してもらおうね」

弟が歓声をあげた。ぼくもラーメンが食べられるのはうれしかったけれど、このあとがどういう展開になるのか不安で、弟のように素直に喜べなかった。母は家に電話してぼくたちが到着したことを告げた。それからぼくたちは母の病室で話をした。弟のやつがは

しやいで一人でしゃべりつづけた。ぼくはバス代のが気になっていつもよりは無口になつていた。母はバス代のことについてひとことも問いたださなかった。ラーメンがふたつ、病室に運ばれてきた。母は、ぼくと弟がラーメンを食べるのを笑顔でみていた。ラーメンを食べ終わり、またしばらく三人で話をしてから母が笑いながらいった。「バス代、どうしたの？」

「借りてきたんだ、古田の婆さんに……」ぼくは母から目をそむけてしまった。まっすぐにみることができなかった。

「だから、返さないといけないんだ」

そういえば母も納得して、それ以上のことは問いつめないだろうとぼくは踏んでいた。小学三年生の知恵なんてその程度のものだつた。お金を盗んだことの、考えうる最高のいいわけだと思つたけど、そうは簡単にことが運ぶわけはなかった。

（川上健一「翼はいつまでも」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「そう。古田の婆さん、なんていったの？」
 「……なんにも……」
 「貸してくださいつていったんでしょ？」
 「……うん……」
 「でもだまつてたの？」
 「……うん……」
 そのあと母がなにもいわないので、ぼくは母を上目づかいにみた。母はやさしく笑ってぼくをみているだけだった。でも、母は泣いていた。ぼくに笑いかけながら、涙が頬をつたっていた。ぼくは母をなかせてしまったとせつなくなつた。本当のことをいわなければ。ぼくは重い口を開いた。
 「貸してつて、心の中で、いったんだ……。口にだしていわなかつた……」
 「そう」
 母はぼくの手をとつた。細くて、あたたかくて、白くて、きれいな手だった。あのぬくもりはいまでもぼくの手に残っている。
 「久志は自分がどういうことをしたか、わかつているわよね」
 「……うん……」
 「これからは絶対にそんなことをしちゃだめよ」
 母はやさしくぼくを諭した。
 「約束してくれる？」
 「……うん……」
 「父ちゃんに、ちゃんとお金を返してもらおうね」
 「うん」
 「約束だよ。久志がやったことは人間としてやってはいけないことなの。でも、本当のことをいつてくれて、母ちゃん、久志のこと、安心したよ。本当のことをいうのは、勇気があるよね。でも母ちゃんは、久志はほんとうのことをいつてくれるとしんじていたよ」
 そういうと、母は突然ベッドの上で息を詰まらせたように泣き出した。ぼくの手をにぎり、ぼくをみつめたまま、ポロポロと涙をこぼした。
 「ごめんなさいね。母ちゃん……本当にごめんなさいね」そういつて母は震えだした。
 なぜ母がぼくに謝らなければならぬのだろう？ ぼくはとまどい、どうしていいのかわからず、だまつて母をみつめることしかできなかった。
 「ごめんなさいね。本当にごめんなさいね」

母は声を震わせていつまでもぼくに謝るのだった。いつまでも……。

(川上健一「翼はいつまでも」)



ニューヨーク市は、世界のゴミの首都といつてもいいでしょう。ニューヨークは毎日二四〇〇〇トンものゴミをすてています。そのほとんどはプラスチック製のパッケージ類です。東京は一日に一二〇〇〇トンすてています。ところでこれらのゴミはいつたどこにいくのでしょうか。大半は、ゴミの埋め立て地にいきますが、すぐにいっぱいになってしまいうので、つきからつきへと新しい場所をさがさなければなりません。

だれもがゴミを自分の家の庭になげこんでほしくありません。だから都市からでたゴミをいなかにもつていつてすてたり、ときには外国にまですてにいくこともあります。一九八七年の三月、三一〇〇トンものニューヨークのゴミをつんだ平底船が、ノースカロライナにあるゴミの埋め立て地に向けて出帆しました。しかし、この埋め立て地はゴミの受け入れを拒否しました。ニューヨーク当局は、このゴミが危険なものではないことの証明をもとめられたにもかかわらず、それをこつたからです。こうしてこのゴミ運搬船は、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナといったアメリカ国内ばかりでなく、メキシコやベリーズまで転々となりました。結局この船はゴミのすて場所をもつて数ヶ月大西洋沿岸をいつたりきたりしたのです。

人々のゴミのすてかたも年々大がかりになっています。かつては洗濯機や自動車のような大型の機械までいなくなるとゴミとしてほうりだされました。しかし、いまではこれらを資源として活用するように奨励されています。ノルウェーなどいくつかの国では、車を買う人は車を買った時点で寄託金をいっしょにはらいます。その車が必要でなくなった時には金属を再利用するためにリカバリーセンターにもちこみ、最初にはらった寄託金をかえしてもらうというシステムなのです。

現在、飲物の容器のほとんどは、再利用されていません。ゴミすて場にすてられそれつきりです。これは、資源とエネルギーの大きなむだです。アメリカのオレゴン州では、リサイクルのための飲物の容器のデポジット制度がはじめて法律でさだめられました。デポジット制度とは、あらかじめ容器代をふくんだ料金で商品売り、空容器をお店にもつていくと容器代をはらいもどししてくれするという制度です。

プラスチックのゴミはほとんど再利用されることはありません。そのため、毎日毎日ものすごい量のプラスチックがすてられています。すが、これは貴重な石油資源の大きなむだです。

工業先進国も、ゴミの多くはすててしまいうにはあまりにも価値の高い資源であることに気づいています。スクラップ工場にもちこまれた自動車は、まず解体され、使える部品をとりはずしたあとにとかさね、ふたたび新しい車をつくる材料の鉄となります。ガラスビンのなかにはちゃんと回収し、洗浄すれば三十回も再利用できるものがあります。ガラスのかけらも、新しいガラスをつくる材料としてリサイクルされ、原料とエネルギーの節約になります。

紙もまた再生できます。一九八四年には九か国の先進国でおこなわれた紙の再生だけで、広大な土地の木がすくわれました。リサイクルされたアルミニウム缶で新しい缶をつくると、ボーキサイトからあらたにアルミニウムをつくるエネルギーの一二分の一ですみます。

(ナイジェル・ホークス著 藤田千枝 監訳「環境を破壊する有害ゴミ」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ところが、リサイクルされているゴミは家庭から毎日出るゴミのほんの一部分にすぎません。リサイクルがむずかしい理由のひとつは、ゴミをだすときに分別しなければならぬところにあります。たとえばかみは、ほかのゴミとまざったとたんになんの価値もなくなってしまう。生ゴミはちゃんとわけてだし、あつめて、うまくくさらせれば土の価値を高める肥料としてつかわれるか、リサイクルされるかしています。

ゴミが効果的に分別されるかどうかは、一般市民の協力の度合にかかっています。アメリカではリサイクルのためと、危険なゴミがほかのゴミとまざらないようにするために、紙やガラスの分別が奨励されています。長い目でみると、リサイクルにはさまざまな経済的な利点があります。リサイクルすれば、原料からつくるときよりエネルギーを大きく節約できるばかりでなく、大気汚染などの公害も半分以下におさえることができます。もし、さまざまな商品がはじめからリサイクルされることを念頭においてデザインされるようになれば、さらに経済的な効率は高まります。

ゴミのなかから価値のある部分が分別されても、のこりの再利用できない部分をどう処理するかという問題はのこります。家庭ゴミを焼却処理することには、いくつかのあきらかな利点があります。

焼却したあとに処理しやすい無害な灰がのこるだけです。焼却炉からは、有効につかえる熱や電気もとれます。しかし、産業廃棄物の焼却と同様な欠点ももっています。焼却炉からでる煙は、不愉快でときには有害なこともあります。そして、焼却するという方法は、現在までのところ、埋め立てよりお金がかかるのです。

しかし、大気汚染の危険や経費がかかるにもかかわらず、多くの都市では、埋め立て地がないために、しかたなくゴミを焼却処理せざるをえないのです。デンマーク、スウェーデン、スイス、そして日本では家庭から出るゴミのほぼ半分までが焼却処理され、うみだされた熱源を産業用、または近くの家庭の暖房などに利用して

います。

ゴミからエネルギーをひきだすさらによい方法として、埋め立て地ですててゴミをくさらせるといふ方法があります。ゴミがくさるとメタンガスが生じます。そこでこのガスをパイプをとおしてあつめ、工場の燃料や、発電所のエネルギー源としてつかうのです。ふつうのゴミからもかなりの量のメタンガスをとりだすことができます。埋め立て地もこの方法を考えに入れて設計されるようになってきています。

(ナイジェル・ホークス著 藤田千枝 監訳「環境を破壊する有害ゴミ」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

科学の進歩、生活水準の向上、人口の増加など、さまざまな原因によつて、二十世紀後半の地球には、急速な汚染、破壊がはじまりました。(中略)

地球は昼間、太陽光によつてあたためられ、夜間その熱を上空に放射しています。こうして、バランスがうまくとれているために、いくら太陽の光を受けても、地球上が灼熱地獄になることはありません。この放射は、赤外線と言う波長の長い、目に見えない光によつておこなわれます。(中略)

ところがいま、夜間に放射されるべき赤外線が、温室効果ガスによつて吸収され、地球に残つてしまうため、地球の温暖化がおきているわけです。(中略)

それでは、地球温暖化するとうなるか。おそらく、南極の氷がとけて、オランダのような海抜の低い土地や島は海に沈んでしまうでしょう。もつとも、旧ソ連のように、かなり寒い国にとつては、少しくらい温暖化したほうが良いという考え方もできるでしょう。しかし、もつとも注目すべきことは、温暖化で砂漠化が進行し、これらの地域に住む人たちは、干ばつによる飢餓状態に追いこまれてしまうということです。

温室効果ガスの中で、二酸化炭素はもつとも身近なものです。二酸化炭素は、自動車の燃料や暖房の燃料として、毎日わたしたちが使っている石油やプロパン、天然ガス、あるいは石炭などの、いわゆる化石燃料から大量に放出されています。

もともと、これらの化石燃料は、生物の死がいからできたものです。石炭は樹木から、石油やガスはエビなどの小さな動物からできたとはいわれています。これらの、化石燃料のもととなる生物は、空気中の二酸化炭素が循環しているだけのことだ、ともいえるでしょう。

しかし、問題はそのスピードなのです。地球の内部に、化石燃料としてたくわえられた二酸化炭素は、何億年、いやそれよりもっと前にたくわえられたのかもしれない。いずれにしても、徐々に地球の中にたくわえられ、大気中の二酸化炭素の濃度は長い年月のあいだ、約三百ppm強で、平衡状態にありました。そして、その状態で生物は進化し、増殖し、発展して

きたのです。最近になって、きわめて急速に二酸化炭素濃度は増加してしまいました。そのため、地球の植物や海は、空気中の二酸化炭素の増加した分を吸収しきれずにいるのです。

また、いっぽうでは、ブラジルやインドネシアなどを中心に、熱帯雨林の伐採が急速に進み、地球上の緑が減少しています。これでは、二酸化炭素はますます増えつづけるという、悪循環におちいつてしまいます。(中略)

そこで、わたしたち親子は、あることを実行にうつしました。すなわち、すでに述べた中国の沙漠をポプラで緑化する事業です。

植物は、葉の気孔から空気中の二酸化炭素を吸って、光と水を使って光合成をおこないながら大きくなります。だから、温暖化の原因の二酸化炭素をポプラに吸わせてしまおうというわけです。そして、緑化されポプラの林に囲まれた中で農業をおこなうのです。

少なくとも、沙漠にポプラを植えて、地球を助けることは、それほどむずかしいことはありません。沙漠にスコップで穴を掘って、二メートルほどに生じたポプラの苗を植えてやればよいのです。だれでもかんたんにできることなのです。

八十七歳のわたしの父は、いまでも中国の沙漠に、ポプラを植えてづけています。今度は、若い、みなさんの番です。

(遠山征雄「世界の沙漠を緑に」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本人は笑わないなど言えば、すこし大げさになりますが、少なくも、日本人は表情にとぼしい、心の中の感情を顔や動作に表さない、ということは、よく言われることです。なるほど言われてみれば、そのとおりです。日本人はいつもお能の面のように、表情のない顔をしている、と言った人もいます。

また日本人は戦争が好きだ、命を捨てることをなんとも思っていない、ということも、世界中で評判になっていきます。そして古くは、ハラキリ、近ごろでは、カミカゼというような日本語が、ひろく外国にまで伝えられているほどです。(中略)

あまりありがたくない評判ばかりならべましたが、実はうれしい評判だつてあるのです。たとえば、日本人は勤勉だ、朝早くから夜おそくまでよく働く、ともいわれています。また、日本人はとてもきれいな好きだとか、がまんづよい、どんな苦しいことでも、歯をくいしばってよくがまんするとか、日本人は手先が器用で、りっぱな美しいものを生み出すとか、いろいろなことをいわれているのです。それがわたしたちにとつて、ほんとうによろこんでいいことなのかどうかということとは、よく判断してみなくてはなりません。しかし世界の人たちの目には、日本人がそういう姿で、うつっているのです。

日本の文化について、ある外国人が、次のように書いているのを読んだことがあります。

日本は二階建ての家で、二階には西洋式の生活や風俗や文化が、なからなまでにそろっている。また一階にはむかしながらの生活や風俗、日本式の文化がそのまま残っている。しかし、ふしぎなことは、その一階と二階とを結ぶ階段がみあたらないことである。——と、そういうたとえを引いて日本の文化の姿を批評しているのです。このたとえも、たしかにおもしろいと思います。わたしたちの生活のまわりを見渡しても、たとえば洋服と和服(着物)、靴とげた、いすの生活と畳の暮らし、洋食と日本料理、西洋画と日本画、西洋音楽と日本音楽、——といったように、一方では日本にむかしから伝わっているものがよるこばれています。町を歩いてみても、ヨーロッパやアメリカの町にくらべて少しもおとらない、りっぱなビルディングが立ちならび、電車や自動車がめまぐるしく走っている。ところが、その町の中にも、のれんをかけ、店さきに畳

をしいた、むかしふうのお店があるし、白壁の土蔵も見られるし、また神社の鳥居がたつていたり、お寺のあたりからお線香の煙りがにおつてきたりする。きれいな訪問着に着飾ったむすめさんが、デラックスな自動車から降りても、わたしたちはあたりまえのこととしてふしぎに思いませんが、外国人の目から見ると、ずいぶんめずらしいことなのでしょう。それと同じことで、よくおすし屋や、おそば屋などの店さきに、テレビが置いてあつて、そのそばに、酉の市で買った大きなまが掛かっていたりする、そんな風景も、外国人にはふしぎでたまらないようです。

一九五七年に日本を訪れたソビエトの作家エレンブルグは、次のように書いています。

「日本は、外から来るものをおどろかせる。最初にめにつるすべてのものが、ひどく矛盾しているように思われる。電化された汽車、いすの背の角度を自由に調節できる、乗り心地のよい車室、そこには食堂もついている。給仕のむすめが香の高いコーヒーを運んでくれる。着物姿のふたりの日本のむすめが手文庫に似た小さな箱を開けて、生魚やほした昆布をつめ合わせたお米の弁当を食べている。食事がおわると、本をとり出す。ひとりにはサルトル(フランスの作家)の小説を手にかけているし、もうひとりには家政の教科書を読んでいる。こんな光景を見ると、自分がいったい世界のどこにいるのか、アジアにいるのか、ヨーロッパにいるのか、アメリカにいるのか、わからなくなる。しかも古い時代、新しい時代、さまざまな世紀がからみ合っているのだ。

日本では、どの日本人も一日のうち何時間はヨーロッパ的な、またはアメリカ的な生活を送り、また何時間かはむかしながらの日本の生活を送っている。日本人のなかには、たがいに異なる二つの世界がいつしよに存在している。」
わたしたちは日ごろ見なれていて、なんとも思わないことが、外国人の目にはこのようにうつっているのです。

(岡田章雄「日本人のこころ」)



読解問題 7月4週分

問1 読解マラソン集1番「日本人の生活で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 明治時代の日本人は、今よりも勤勉であった
B インドネシアでは、めったに大人は走らない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「日本人の生活で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本語の「ハタラク」は、英語よりも使える範囲が広く微妙である
B 日本語では、「遊ぶ」という言葉にはマイナスのニュアンスがある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「若い人達の」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「申される」より「言われる」の方が正しい
B 会社の電話交換手が、他からかかった電話口で「社長が申しますには」というのは正しい
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「若い人達の」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 敬語の言葉づかいの乱れは、戦前にもあった
B ふだんの言葉づかいと、よそゆきの言葉づかいは、使い分ける必要がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「春太は、さっきから」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 春太は、ハツのことを少し好きだったので、まっかになってしまった
B 春太は、ボールがそれてくるのを待っていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「春太は、さっきから」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A アサコが持っているボールを、春太は横からすばやく奪い取った
B アサコが謝ると、春太も心の中で謝った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「美術担当の先生洋は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 写生大会なのに、根元少年はほんのわずかし絵を描いていなかった
B 写生大会では、先生も絵を描くことになっていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「美術担当の先生洋は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 根元少年は、自分がさぼっていたことを素直に認めた
B 根元少年は、先生がいる場所をよく見ていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 8月4週分

問1 読解マラソン集5番「さっきの女の子は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 女の子は、先生に手伝ってもらった絵ではなく、自分なりの絵を描^{えが}きたいと思っていた
B 洋は、なかなか終わらない女の子の様子を見て、少しいらいらしていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「さっきの女の子は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 洋は、本当は自分がすることになっていた終^{しゅうりょうせんげん}了宣言を、ほかの人にかわってもらうことにした
B 洋は、ふたりの絵が仕上がるまで待っていようと思った
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「私^{わたし}は、小学校^{ころ}の頃」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私^{わたし}は、先生からもらった「賞^{ころ}」と入ったノートに何も書かなかった
B 私^{わたし}は、小学校^{ころ}の頃から、作文と運動が得意^{とくい}だった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「私^{わたし}は、小学校^{ころ}の頃」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 私^{わたし}は、パーティーの席^こで、六十を超えた先生から事実を聞いた
B 私^{わたし}は、中学に入る頃^{ころ}から丈夫になり、積極^{じようぶ}的になった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「バスにのっても」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ぼくと弟は先に病院^{れんらく}に連絡していたので、母はバス停で待っていてくれた
B 爺^いちゃんと婆^{ばあ}ちゃんは、二人が病院に行くことをうすうす知っていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「バスにのっても」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 母は、病室に入るとすぐに、ぼくにバス代のことを聞いた
B ぼくは、古田^{ぼあ}の婆さんからお金を借りてきたのだった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「そう。古田^{ぼあ}の婆さん」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A ぼくは、古田^{ぼあ}の婆さんのところから黙^{だま}ってお金を持ってきてしまった
B ぼくは、母にあやまりながら泣き出してしまった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「そう。古田^{ぼあ}の婆さん」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 「ごめんなさいね」と言ったのは、ぼくではなくて母^{ぼく}だった
B 母は、「お金を返さないのはいけないことだ」と僕^{ぼく}を諭^{さと}した
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 9月4週分

問1 読解マラソン集9番「ニューヨーク市は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ニューヨークのごみを積んだ船が、ノースカロライナの埋め立て地から受け入れを拒否されたのは、危険なごみがあったためである

B ニューヨークのごみを積んだ船は、結局捨てる場所が見つからず、ごみを大西洋に捨てるしかなかった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「ニューヨーク市は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A ノルウェーでは、車を買ったときに、車が要らなくなったときに再利用するための費用もはらう

B プラスチックのごみは、再利用する方が新たに作るよりコストがかからない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「ところが、リサイクル」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 紙は、ほかのゴミとまざると再利用できなくなる

B 市民の協力がなければ、ごみの効果的な分別はできない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「ところが、リサイクル」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 焼却という方法は埋め立てよりもお金がかからないので、日本ではよく利用されている

B 商品が、最初からリサイクルを考えて作られれば、経済的にも効果がある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「科学の進歩」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 地球は、昼間太陽にあたためられても、夜間に赤外線での熱を放射するので熱くなりすぎない

B 地球が温暖化すると、これまで寒冷地だったところは暖かくなるので過ごしやすくなる場所になる

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「科学の進歩」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 大気中の二酸化炭素は、これまでずっと減ってきていたが、最近急速に増えてきた

B 植物の中には、二酸化炭素を吸収するものとしめないものがある

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「日本人は笑わない」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人は、西洋のものはありがたがるが、肝心の日本のものは評価しない

B 日本人の生活には、西洋の文化と日本の文化の両方が存在している

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「日本人は笑わない」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 外国の人たちは、日本人がもっと自分たちの文化を大切にすべきだと思っている

B 日本人自身も、西洋の文化と日本の文化を共存させることに苦労している

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×